

〈図書紹介〉

下出祐太郎・成田智恵子・下出茉莉

『京の美の継承』

村上 忠 喜

本書を手にして「ああ、なんてきれいな本」と思った人は多いのではないだろうか。ぱらぱらとページをめくれば、見開きに必ず1枚はカラー写真、それもしっかりと撮影されたプロの手による写真が配置されている。意識されての編集なのだろう、工芸作家とその継承者の人物写真、作業場の風景、作品の全体と部分、使われる道具や材料、そして京都の自然や寺社のたたずみ、祭礼の造形などの写真が、美しいコラージュのように本書を飾る。

本書はそのタイトル通り、数々の作品を世に出すことで京都の美を表現されている、当代一

流の伝統工芸作家や職人さんとその後継者に対する聞き取り調査の採録である。内容的にはそれぞれの職人さんによって違うが、どのような経緯で現在の職業に就かれたのかというところからはじまって、仕事内容の詳細、各業界の推移や現状、育成を含む後継者問題、そして仕事の内容に底流する美術的な素養、またそうしたものが京都の自然とか社会環境とどのように関わっていると考えているか、というような話題等多岐にわたる。

後継者に対しては、どういう契機で後を継ごうと思うに至ったか、その覚悟や魅力について語ってもらっている。聞き手による質問は赤文字で、工芸作家や職人さんご本人の発言は黒文字、そして後継者の発言は青文字を使うというように、読み手が混同せぬように配慮するという気配りで、採録の状況が生き生きと伝わるように編集されている。聞き手である三名の著者も、伝統工芸に携わると同時にそれを研究する、そして大げさに言

うとそれを後継することを運命づけられた方々である。

本書に登場するのは、陶芸、有職織物、京友禪、能装束、京鹿の子絞、京繡、庭園、京石工芸、仏像と截金、仏画、箔、鍔金具、京たたみ、京指物、京蒔絵の一五業種の作家や職人さんである。このうち六業種のインタビューのみ、息子さんや娘さんなどの後継予定の方も加わっている。全体の四割であり、このことは一方で伝承が厳しい現実であることをも示している。

本書に登場するのは、いわば伝統工芸等の花形であり、多くの場合、完成作品を記名で発表できる人々である。しかしながらかつての手仕事の中の多くは、機械化によって、あるいは時代の潮流の中で、まったく失われてしまった業種は少なくないということは一面の現実であることは忘れてはならないだろう。

それは措くとして、本書の特長は、そのインタ

ビューの質の高さにある。その大きな理由は、聞き手が伝統工芸を生業とし、かつそれを研究している人間であるからにはかならない。実のところ工芸ほど学問的に検証しにくい分野はないと私は常々思ってきた。私の専門は民俗学であり、幸運にも、かねてより祇園祭をはじめとする山・鉾・屋台の造形作品の復原や修理事業にかかわる機会を持ってきた。そこで学問的に、技術的なところまで検証していく手段の困難さに何度も直面してきたのである。確かに、服飾なら服飾史があり、金工なら飾り金具の歴史を研究する、あるいは金属分析の専門家はごく少数であるがおられることは間違いない。ただ、やはり職人さんの経験値には敵わぬところ、頼らざるを得ないところが多々あるのである。そうでないと、日本の文化をより豊かに表現する様々な造形の美は生み出せないし、継承もできない。それは厳然たる事実であると思う。

本書には考えさせられる記述が盛りだくさんではあるが、そのなかでも私の関心を大きく引いたのが箔の野口さんのインタビュー記事であった。それは光琳の「紅白梅図」の箔に関する話で、東京文化財研究所の科学分析データに基づく評価を、職人の感覚で間違いだと思い、箔の製作工程等の知見を駆使して論文文化され、光琳の評価を覆されたところなどは、なかなか圧巻の採録である。ここまでされる職人さんは少ないと思うが、先にご紹介した山・鉦・屋台の造形作品の修理などに、職人さんの経験値や発想を第一義的に考えねばならないことに通じる話である。

本書に掲載されている職人さんは、分業の最終段階か、それに近いところの職人さんである。いわば作品や製品のプロデュースをも手掛ける方々である。私の数少ない経験のなかに、残念ながら廃業に追い込まれるに至った職人さんの職場の道具類の調査などを手掛けたことが数回だけある。

調査の過程で印象に残ったことのひとつに、数代続く職人さんの家には、予想以上に多くの書籍や図版が残されているのかということであった。考えてみれば当たり前のことなのであって、製品開発のためには勉強は不可欠なのである。私の知る一流と呼ばれる職人さんはいずれも勉強家で、意識してよいものを見に行く、あるいは金銭的に少々無理をしてでも、ここという時に贅沢することを心掛ける方がおられた。そうしないと目が曇ると言われるのである。そうした場や空間に容易に接することができる京都という環境もまた、本書は視野に収めている。

最後に、工芸史の研究者との対談で本書を締めくくっている。本書は、現代の伝統工芸の、名実ともに一線で活躍されている方々の本音をあぶりだした好著である。

（京都新聞出版センター 二〇二一年三月二二日
二二〇〇円＋税 二〇二頁）

